8-

神代翁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
８－

【Ｎコード】
Ｎ４５７４Ｚ

【作者名】
神代翁

【あらすじ】
２０年前、怪と呼称される化物が現れた。
最初は、特段危機を感じる程の能力を持たなかった彼らは、時と共に、あるいは外的刺激と共に変化反応――進化し、やがて戦場は泥沼化を始めた。
相手が学習する所為で強力な兵装を使えば使うほど、己の首を絞める結果となる。
何処から来るかわからず、どれだけの数がいるかもわからない。

何も得ることのない戦争に疲れた人類は、人間兵器の作成使用に踏み切った――――

プロローグ

プロローグ

鉄格子の嵌められた窓から、五月の暖かな陽光が差し込んでいる。灰色を基調とした取り調べ室じみた部屋で僕は椅子に座らされ、目の前に座る男と話していた。

「まずは、おめでとうと言わせてもらおう」

カマキリみたいな細顔に銀縁フレームの眼鏡。度が強いせいで目が大きく見えて、そこもまたカマキリっぽい。実物は見た事がないけど。スーツの色がダークグレーじゃなく緑色だったら完璧だったのに。

カマキリ男改め三笠寛人一佐が僕の目を真っ直ぐ見つめながら口を開く。

「最終プログラムに残った17組の被験体の中から君たち――和人で、あってるかね？　あぁ、そうそう。苗字は弘中が支給されるから、以後それを名乗る様に」

頷きを返す僕に三笠一佐は手元の資料を捲りながら言葉を紡いでいく。

「他のプランは君たちのところのように時間通りに完成しなかったようでね。君が編入後、一体が追加される以外は暫くこないようだ。接続骨子の調子はどうかね？　頷くのではなく」

「大丈夫だと思います」

「ふむ。君の場合は脳とそこの繋がりが要だからな。まぁ、検査結果も良好だ。活躍を期待している。では、君が現状を正しく確認しているかを確認させてくれ」

「了解。――現在、日本国及び世界の国々には幽霊が「日本での名称は怪だ」了解。怪が多数出没しており、怪がどこからくるのか、また突然現れる特徴からどういった移動手段ないしは物質構成力を

持っているか現在調査中。大きくわけて怪には三種あり、脊椎動物を象った骨型、昆虫に類する外形能力を持つ蟲型、主に意志ある無機物として行動する無形型、の三種です。「無形型の所以は？」霧状や霞状になってレーダー機器の破壊、及びこちら側の錯乱に努めるからです。また、非常にレアなケースではありますが富士山脈における金属壁状防壁などの形も確認されており、一重にコレだ、という共通項がないためです」

そこまで話した僕を、腕を振って止め、三笠一佐が付け加えるように言う。

「君の、君たちの行動意義が変更されている事は担当官から報告されているか？」

「はい。本来の製造目的は人類に代わって怪との戦闘を引き受ける事でしたが、目標数が揃わなかった為、目的を修正して、出来うる限り人類側の損害を軽微にすること」

「そうだ。そしてこの決定に対して陸軍内部で決定があった。君が戦場に出ている時に、上から階級順に二名が死亡ないしは指揮不能に陥った場合、君の階級は陸曹スタートだが、階級と関係なしに君に指揮権がうつる。つまり、君たちが稼働するのは上位二官が死亡ないしは行動不能に陥った場合だ。了解したか？」

「了解」

「では解散。以後は真田三尉が引き継ぐ」

三笠一佐の敬礼に僕も敬礼を返し、三笠一佐の右後ろに控えていた真田三尉の後に続いて部屋を出る。無機質な廊下をコツカツと足音を立てながら歩いて行く。先は陽光の差し込む方向であるのに、見通せない程の闇を感じるのは何故だろうか？

三笠寛人は弘中和人のカルテをパラパラと捲っていた。総合成績は甲の最高値だが、三笠は彼よりも上がいた事を知っている。そのペアはグリングと呼ばれ、１７組中最も期待されていたペアだったが、最後の接続骨子の調整に失敗して脳が焼き切れてしまった為に

繰り上げで弘中和人が最前線に投入される運びとなった。
三笠は思う。
今現在、人間は倫理観の限界地点に来ていると。弘中和人たち実験体は人工子宮で生まれた設計子供（デザイナチルドレン）だが、人と同じ遺伝子を持ちながら人として見なされないのは何故だろうか？　生を与えられ、性を与えられ、人の為に、人と似た機械として死んでいく。
三笠は思う。
我々は何処かで、間違ってはならない道を間違ってしまったのではないかと。
だが、怪との戦闘は２０年間続いている。全人類の四分の一、耕作可能地の四割が失われた。これから先、世界では慢性的な飢餓が輪をかけて酷くなるだろう。コレ以上人類を減らすわけにもいかず、さらには迅速に耕作地を取り戻す必要がある。だから、間違っていようとも進む必要性がある。そう重い息を腹に沈めながら自分を納得させる。
弘中和人のカルテを捲っていると興味深い説明を見つけた。思わず頬がほころぶ。
『逢いたくて』
彼はそう答えたのか。なるほど。奇知外に知識と能力を与えれば、現在の状況に風穴が空くとでも？　研究者も行きずまってきているのか。カルテの続きには万が一彼が暴走した際に止める手段が七ページに渡って書き込まれていた。
「逢いたくて、か」
基地司令部のどこかで、重々しい排気音が唸りを上げ、やがて遠ざかっていく。
三笠はカルテの中から彼の精神状態に関して書かれたページから何枚かを抜き取り、そしらぬふりをしてカルテを所定の位置に戻しに行った。
能力値的には問題ない。

お前が世界を変えられるか、見ていてやるよ。

プロローグ（後書き）

自分何が出来るんだろう、という事でアクション系を試してみます。付き合って頂けるなら幸い、叩いてくれるなら僥倖、感想がくるなら五体投地して床を舐めますｗ

所在　一

所在

弘中和人が軍用車両に乗せられて連れてこられたのは、富士の山が見える基地。２０年前に始まった戦いの最中、もっとも早く増設された基地である富士宮基地だった。怪は人の多い方向に移動する習性があり、日本の怪が主に発生するのは富士周辺であることからも、富士山を囲むようにして基地あるいは塹壕が築かれている。

だが、２０年間人類の全勝だった訳ではない。初めて無形の怪が確認された時、全体の八割の無線及び赤外線探知機が動作不能になり、果てには霧に包まれて衛星さえも使えなくなった。現場の兵士に何が起きてるかがわからないままに、気付いたら東京に怪の大部隊がいた。７万人の死亡が確認され４０万人は以前行方不明扱いとなっている。第一次東京怪災と呼ばれる怪災である。第一次では東京に居座る人も６００万人はいたといわれるが、居座らざるを得なかったのかもしれないが、第二次第三次と起きた怪災によって全員の心が折れるか、死亡するかした。以後怪の一団は名古屋、大阪と狙いを変えていき、２０年経った今では富士山から半径２００キロメートル圏内にいる人間は軍関係者だけとなっている。

真田三尉は何も話さず前を歩いて行く。富士宮基地の中は誰もいないかのようにシンとしていたが、時折誰かの視線を感じて振り返るとそこには富士宮基地の兵士たちがいて、興味深そうに、あるいは気味悪そうに僕の事を見ている。

やがて、僕に与えられる部屋についたらしく、真田三尉が「入れ」と低い声で言った。声に従って部屋に入ると、四畳程の空間に二段ベッドが一つ、僕の背丈ほどある緑色のロッカーが二つあるだけの、窓さえない部屋だった。洋式のトイレがとってつけたように壁際に鎮座している。

「現在時刻は１４：３７。夕食は１８：００からだ。それまでこの

部屋にて待機」
了解、と返すと真田三尉は部屋を出、扉に鍵を掛けて行ってしまった。外からは鍵が掛けられるのに、中からは掛けられないという囚人部屋のような設計。窓がないのも逃走等を警戒しての事かもしれない。
――逃げるわけないのに。
そういう風に作られたんだから。嘆息しながら並んでいるロッカーの右側を開ける。迷彩服が上下二着ずつ、それから白いＴシャツが二枚に、トランクスが二枚。無機質な鉄の箱が一つ。
箱は長方形をしていて、全長約１５？、全幅２０？、厚さは５？、重さは３キロ。箱の側面から何かのコードが伸びている。端子は通常の家庭機器にはあり得ない程太く、赤い色をしていた。床に座り込んだ僕はコードを摘み、首の後ろ側を引っ掻いて皮膚に偽装された蓋を開けると、そこにある筈のジャックに端子を突き刺した。
「い」
脳を突き刺す様な刺激がビリビリと駆け抜け、やがて網膜に直接映像が映し出される。今見ている景色の上に青い画面があって、その上に初期設定の文字が踊り、滝の様に文字が流れて箱が、箱の中の機械が僕と同調を始めていく。
『初期設定：開始』
『所持者：　　』
所持者の欄に意識を合わせて「弘中和人」と漢字を思い浮かべる。すると『所持者：弘中和人』と設定画面が書き変わり、続いて年齢体重血液型特定の持病等と設定が行われていく。
パソコンに後付けでつけるＨＤのようなものだ。僕自身の脳もいじくられていて、その容積の２０％は機械が占めているが、それに更に演算能力を足す為の後付けとしてコレを使う。と言う事を僕は聞いて知っていたし、実際に使った事もあった。ただ、実験で使われた物よりもコレは数段パワーが上だった。恐ろしい速さで１と０が書き変わっていくのを感じる。ともすれば僕自身の演算能力が負

けて、時折視界がブロック状に割れて1と0と意味不明の単語が羅列された。
どれだけ箱――説明でも箱と言われた――と繋がっていたかわからないけど、ノックされる音に気付いて僕は首筋から端子を抜いた。強制終了に文句をいう事も無く、待機状態を維持する僕の脳。
またしても真田三尉が「入れ」と低い声で言い、続いて誰かが部屋に入ってくる。それを僕は冷たいコンクリートの床から立ち上がり、直立不動で眺めていた。
肩で切りそろえられた真っ白の髪と、血の色をした瞳が目に入った。カーキ色の野戦服に身を包んだソレは黒くて細長いケースを大事そうに抱き締めている。
「初めまして。頭脳特化の弘中和人です」
「初めまして。肉体強化の赤目です」
コクンと頷き、慌てて敬礼をしたソレに向かって僕も敬礼を返しながら「赤目？」と尋ねた。
「人間味を排除する為に性を与えられていません。頭脳特化と違って私は戦う為だけに作られましたから」
なるほど、と僕は頷いた。だけど、僕自身も僕に戦う以外の使命があると始めて知った。
やがて赤目の担当だった男が部屋の扉を閉め、しっかりと鍵を掛けて三度ほど確認してどこかへと歩き去った。
四肢はある、頭もある、だが、異様に細い。僕が男の兵士しか見た事がないせいだろうか？　赤目は女性体の兵士であるようだった。戦う為に作られたにしてはあまりに細い足、枯れ木のような腕。眼光が時々チキチキと音を発てて光る。階級章は二等兵。
「僕が上官と言う事でいいのかな……。親睦を深めるのはとりあえずおいといて、まずはベッドの上と下を決めよう」
「私は下を希望します」
「上官権限で却下する。君は上だ。それからロッカーは左を使ってくれ。僕は右を開けてしまった」

あっと言う間に話題が尽きた。赤目がそろそろと歩いて左のロッカーを開ける、
「あの、」
「ん？」
「男物が入っているのですが……」
これはどうなるのだろうか？　確かに僕らは人に似た機械として作られた。だけど、女性の体を持つ以上、支給品も女性の物にするべきではないのか？　「少し待っててくれ」と赤目に言い、先ほど中断した初期設定を再開する。
初期設定を終えると予想通り、基地内部と繋がるＬＡＮが一つだけあった。そこにアクセスし、赤目の支給品について問い合わせると、
『ひと月後の支給までそれで代用されたし』
という返事が返ってきた。ソレにふむふむと頷き、書いてあることを赤目に向けて音読してやる。すると赤目は少しだけ困った顔をしてから、「わかりました」と敬礼をした。この場合敬礼はいらないのではなかろうか、そう思い僕は「私用の場合は敬礼はいらないのではないか？」と赤目に訊ね「上官殿にはいつも敬礼だと教わりました」と返され「これから共同で暮らすのに敬礼は面倒であろう」と言い返す。三十分程かかって僕は赤目に、自室内においては敬礼と敬語を使わなくて良い、階級を意識しなくて良いと取り決めた。それに対して赤目が「じゃあ私ベッド下が良いです」と反論してきたので話はややこしくなり、結局夕食の時間までありとあらゆる事について言い争う結果となった。頭脳特化の僕の圧勝、もとい詐欺師の口上が炸裂した。

所在　一（後書き）

読んで下さっている方よ、本当にありがとう。

一つだけ謝らなければならないことがあるのです。

……ごめん、タイトル飾り――――――――！

所在　二

食事は全員が広間に集まってから行われる。時間の十分前にこなければ飯は抜かれる。

席にあまりはなく、僕と赤目が向き合って座る両隣にも他の兵士はいたのだが、極限まで席を僕達から離している為、ほとんど専用テーブルとなってしまった。僕と赤目は機械的に夕食を食べ、機械的に盆を返し、機械的に挨拶をして自室へと戻った。後ろには真田三尉がついてきていて、僕らが部屋に入ると鍵を閉めた。

部屋に入ると僕は箱を持ってベッドに寝そべり、箱の能力値を理解する為に電子の海に潜りっぱなしになり、赤目は細長いケースからドラグノフを取り出して整備を始めた。細長いケースにはドラグノフの他にＭ４Ａ１と自動式拳銃が収まっており、それぞれ９０発ずつ弾も入っていた。

「ふぅ」

目を剥くような速さで三丁の分解整備を終えた赤目が冷たいコンクリートの床に寝そべった。ベッドの下が取れなかった事が余程悔しいらしく、半眼で僕を見ている。なるほど。確かに上では銃器の分解整備は天井が近すぎてできまい。

そして、彼女が赤目という名を与えられたのは、普通の人間にしか見えない彼女を道具として扱う為なのだろう。そうぼんやり考えた。

「頭脳特化って、」

「ん？」

「何をする為に作られたんですか？　私は解を求める為に、って聞いたんですけど」

「解？　あぁ。指揮官になるべく作られたんだよ。この戦況はどうだ、というのを確認する為に後付けの箱まで使って計算し、戦場を最適解に導いていく。僕らはその為に作られた。無形が現れたさい

にも、有線を使っていれば最低限の計算は出来るしね」
と赤いコードを目の前に掲げて見せる。すると赤目が、
「私は今ある兵器を最大限に活用する為に作られました。進化、御存じですよね？」
もちろんと頷く。
進化とは、怪の成長の事である。環境進化と適応進化の二つがあるのが昨今では知られているが、そのうちの環境進化は出没する地域によって形態を変化させること。例えば日本ではあまり見られないが、ロシアの奥地などになると怪に毛が生えたり、皮下脂肪が厚くなったりするらしい。コレに対して適応進化とは、外敵。つまるところ僕らの攻撃に対して適応していくことを示す。例えば日本やアメリカ等に出没する怪には熱系の攻撃が効きにくい。怪が出てから数年間、日本は町での出現が多かったために火炎放射器を使った事、アメリカは広大で何もない土地に怪が現れた場合は迷いなくミサイルや焼夷弾を打ち込んだ事に由来する。不燃性の液で体を包んだり、表皮組織を瞬間的に捨てて再生させたり。そう言った特性を持ち出している。
だから、僕らは驚異的な威力を誇る武器を持ちながら、それを使う事が出来ない。万が一それに適応された場合、自分達の首を絞める事に繋がってしまうからだ。だが、適応進化は進化を誘導する事が出来る。貫通力に優れた攻撃が来た場合は、単純に貫通力を弱める生物へと変性していく。
つまるところ、銃だけを使っている限り彼らは、皮膚を硬くする、臓器を極端に守る、速度を上げて避ける、等の基礎能力しか進化できないわけだ。各国はこの適応進化を酷く恐れている。
とある共和国において、ドルトンの悪夢と呼ばれる事件が起こった。共和国軍が「怪の体内組成は人間や他の動物とも大きく異なるが、タンパク質の塊であり、酸素も必要とする」としてサルファ・マスタード等の生物兵器による鎮圧を開始した。
最初は良かった。怪たちは為すすべもなく薬に焼かれて死亡し、

ガスは拡散し問題ない濃度まで下がる。繰り返した。繰り返した繰り返した。馬鹿の一つ覚えのように繰り返した。

結論からいおう。土中を移動するタイプの怪が多数発生、共和国軍が気付く事もないままに怪は首都まで土中を移動し、唐突に尾を外気に晒し、彼らがやったことをと同じ事をした。サルファ・マスタード、ホスゲン、種々多様な毒ガスが首都を包み、首脳が逃げる間もないうちに国が滅んだ。近隣二国もその被害を受けたが、その当時は辛うじて残っていた国連軍が総出で動いて土中を移動するタイプの怪を殲滅した。

――どこからでも現れて、こちらを追うように攻撃してくる。まるで幽霊（ゴースト）だ。

誰が言い始めたかは知らない。だけど共通意識として皆が持っている。そんな言葉。

「私は可能な限り銃を使い続ける為に設計されました。目、わかりますか？」

「たまに黒目の部分……赤目の部分かな？　その周囲が動くね」

「機械に眼球の補助をさせているんです。黒目にしていないのはレンズが天然物ではなく人工物だからなんですが、人工着色をする必要性がないため、また精度が乱れる場合があるので。血の色がそのまま浮き出ています」

どうりで血の赤なわけだ。なるほど、と頷き、期待に満ちた目で見ている赤目をぼんやりと眺める。そんな目で見られても、僕にはそんなビックリ面白機能は頭蓋骨の中にしかないんだけど……。まさか頭蓋を割って見せろというのだろうか？　いやいやそんなまさか。

「明言しておくけど、僕にはそんな目で見てビックリみたいな物はないからね？」

「首の後ろ、どうなってるんですか？」

見えないから意識から外れていた。僕はベッドの上で態勢を変えてうつ伏せになり、右手で首筋を引っ掻いてジャックを赤目の前に晒した。
「おぉぉ～」
赤目の手がうずうずと動くのを見て、「触ってもいいよ」と言う。すると、おずおずとではあるが赤目が僕の接続骨子の辺りを触っているらしい。らしいというのはその辺りの感覚が、麻酔をかけたようにぼんやりとしたモノであるからだ。特に接続骨子のジャックなんて何も感じない。ただ押された圧迫感が喉の奥の方にくるだけだ。
やがて満足したのか赤目が僕から離れ、いそいそと二段ベッドの上におとなしく収まった。銃のケースはちゃっかり上に持ち込んでいる。油臭くなるのが気にならないのだろうか？
「なんて呼べばいいんでしょうね？」
「は？」
「弘中さんですかね、和人さんですかね？　それとも隊長！　でしょうか？」
「……好きに呼べばいいと思う」
「ではでは和人さんで。ところで和人さんは、実験所でも和人って呼ばれていたんですか？」
「……グレーテルが僕らペアの名前だったよ。揶揄して帽子屋なんて呼ぶ人もいたけどさ」
「ペア？　ペアの方はいらしてないんですか？　あと、帽子屋？」
「ペアは箱の事だよ。繋げば、繋げればわかるかもしれないけど、何となくもう一人、なんだよ。研究員達も僕らを、僕しかいないのに「お前ら」って複数形で呼ぶ事があるから。それで皆ペアって自分の事を呼ぶようになった。帽子屋は……鏡の国のアリスって童話、知ってる？」
「知らないです」
「アリスは鏡の国っていう不可思議なところにいってなんやかんや、って話なんだけど。帽子屋っていうのはそこに出てくるオカシナ人

のこと」
　１９世紀のイギリス、帽子屋では帽子の防水加工にシンナーを使っていたという話もある。以外に童話と言うのはそういうところからも情報を取り入れているものだった。
「すごいですね～。どうして知っているんですか？」
　消灯時間を過ぎたらしく、電灯が何の前触れもなく消えた。どうりで電灯のスイッチがないわけだ、と一人納得しながら、
「頭脳特化は何が起きても対応できるようにひたすら知識を詰め込まれるんだよ。関係無いと思われる知識まで、ひたすら。基本的には戦術の勉強……なのかな。とか、国語とか数学やったり、色んな国の言葉を習い続けたり。ひたすら頭を使い続ける感じかな」
「私たちは逆ですね。頭なんて使いません。ひたすら的を撃ったり、飴玉と１５０ｍｌの水を渡されて、フル装備で山を１２時間以内に二つ踏破してこい、とか。２キロ先の的に、スコープを使わずに弾丸を当てたり」
「２キロ？　スコープを使わずに？」
「はい。集中すると目の焦点倍率を変更できるんですよ。できたからと言って、当てるのは簡単じゃないんですけどね」
　たはは、と赤目がベッドの上で笑う。でも、赤目はできたからココにいるのだ。人と機械のハイブリッド。それが僕と赤目。戦場を変える為に生まれた兵器。
「そうそう、そう言えば――」
「君、眠る気ないだろう？」

所在　二（後書き）

読んで下さる方って本当に偉大ですよ。
だって素人のですよ？　毒にあたる可能性が高いのをわざわざ読んでくれてるんですよ？
その中でもキャリア一年ちょっとの私という、解毒不可能クラスの物を読んで下さっている方、本当にありがとうございます！

所在　三

早朝５時５０分に突然点灯する電灯。それに合わせて鳴り響くサイレン。起床の時間だ。

起き上がって赤目と一緒に装備を点検し、布団を畳んで直立不動で待機。していると案の定ノックと同時に「真田三尉だ。朝食の時間だ、出ろ」と言って扉が開けられる。

外に出ると肌寒いくらいの温度で、いかに中が蒸し暑かったかがわかる。額から零れる汗を拭いながら身震いを一つ。

朝食の時間は昨日の繰り返しだった。皆が限界まで僕らから離れて朝食を食べる。私語は慎まれるのが良いが、特段禁止されてもいないのに無音。――と、その無音を打ち破る男がいた。

「――うぉっほん！」

咳払いをして自身に注目を集めさせたのは、東中基地司令だった。周りの皆が僕らから視線を逸らしてうげぇ、という顔をした。何か良くない事が始まるらしい。

演説が始まった。

この基地の生い立ちに始まり、何故か途中に東中基地司令の半生を挟み、第一次東京怪災に対して意見を述べ、何故か東中基地司令の恋物語が語られ、隣にいた士官が頭を小突かれ青筋を浮かべそれでも笑顔で頷き、最後に僕らの話になった。

ようやくすると、お前らなんか使わないで大丈夫。せいぜいただ飯ぐらいであれ、とのこと。

その言葉に僕と赤目を思わず目を合わせた。だって、そんなの――困る。アナタ達を守る為に作られたのに、アナタ達の代わりに戦いに来たのに、ただ飯食ってろはない。あんまりだ。そう憤りながらも僕と赤目は同意を求められる度に黙って頷いていた。東中基地司令は同意を求めながらも、こちらを決して見なかったけど。

朝食の後、一般兵はランニングに行き、僕と赤目は真田三尉に連れられて基地の外に出た。赤目は朝食の時にも持ってきていた銃ケースを愛おしそうに抱き締めながら、僕よりも幾分か速いペースで歩いて行く。

連れてこられたのは地平線の先に山が見える――射撃場。僕が目視する限り、限りなく遠くに豆粒より小さい何かが赤い何かを振った？　事がわかるだけ。

「赤目二等兵、ドラグノフでアレを撃ちぬけるか？　約１５００ｍ離れているが」

「可能です」

やって見ろと促されて赤目が銃ケースから黄色いペイントが施されているドラグノフを出した。そして徐に立ち上がり、顔をドラグノフのやや上側に置き、腕と腰を使ってホールド。それらの作業が完了し、間髪入れずに撃った。タァーンと乾いた音が鳴り、双眼鏡を覗いていた真田三尉が「命中。恐らく中央」と言った。そしてその後に「スコープ覗いてなかったよな？」と一人心地だ。その後も赤目は何度か撃ったが、一度たりとも外さず、逆に二度目からは数発連続で撃つ有様だった。一発撃つ毎に、赤目の足元の土が僅かに削れる。軍用ブーツを僅かに滑らせながら、全身を使って衝撃を地面に逃し続けている。銃と言う簡単な仕組みの武器を使う為に、人体を改造して辿り着いた境地。武器そのものよりも遥かに進んだ技術を使ってできた人間兵器。

やがて真田三尉がどこかに連絡を取った。すると、的の方に軍服姿が何人か現れて、最初の的のさらに向こう、恐らくは１００ｍずつ感覚を開けて的を設置していく。しているんだと思う。僕にはほとんど見えない距離だから。

「よし、退避」真田三尉の連絡によって人影が走って逃げた、と思う。

「撃ちます」

宣言通りにドラグノフを震わせる赤目。間髪入れずに追加された

的と同じ４発を撃ち終わり、ドラグノフにセーフティをかけてから降ろす。「後藤、山田、吉島、佐田。至急確認」そう真田三尉が無線連絡すると、「１６００ｍ地点、中央に命中」「１７００ｍ、同上」「１８００ｍ、同じく」「１９００ｍ、当たってます。あ、いや、中央に命中」と連絡が帰ってきた。おおぉーと周りがどよめく。気が付けば、ランニング途中と思われる兵士がそこら中を取り囲んで見ていた。見世物小屋に集まる見物人のようだ。

「赤目二等兵、最高で何ｍの狙撃が可能だ？」

「２３９０ｍです。スコープ使ってもそれくらい……」

「人間に劣ってんじゃん」

周りの人ゴミからボソリと風に乗って聞こえた声。ピクリ、と赤目が肩を揺らす。すると別の位置から「待てよ、確か最高記録は２６７０ｍだろ？　ただあっちは寝撃ちだろ？」「別に狙撃兵なんだから立たなくてもいいじゃんか」「日本は富士さんの周りにも町があるから、移動可能で即時撤収可能な兵員が求められてるだろ。だから立ち撃ちなんじゃねぇか。馬鹿かお前」「ぁん？　現在の戦法が囲んで追い立てて、集中攻撃で仕留めるスタイルだろうが。教本やりなおしてこいよ頭空っぽ」「だからソレは俺らのオーソドックスなスタイルだろ？　損耗を極限まで減らした」「だからどうしたよ」「強化特化組の最終目標思い出せよ。分隊レベルで戦場を優勢に導く、ないしは１０倍の戦力を相手に味方の撤退時間を稼ぎ切る事だろ？　通常の方法でできるんなら苦労ないっての、鳥頭」「んだとゴラぁ！」「吼えてんじゃねぇよ低能」「てめぇ、ちっとばっか座学できるからってなぁ、調子のってっといわすぞ？　実技は俺の方が上だからな？」坊主頭が腕まくりをしながら立ち上がり、軍帽を被った方がやれやれと首を振りながら立ち上がる。周りは誰も止めない。むしろ囃し立てている。赤目は目を白黒させている。真田三尉は口元に手をあてて、

「全員、昼飯抜きにされたいか！」

真田三尉が吼えた。すると、立ち上がっている二名以外が匍匐前

進で実に素早くその場から離れた。「すまん」「少しはわけてやる」「グッラック！」等と声をかけつつ逃げていくが、声を聞かれたら姿を隠しても意味がないのではないだろうか？　立ち上がった二人も「気を付け！　歯を食いしばれ！」と頬を張られ、その後に解散。くるりと赤目に向き直った真田三尉が「あー」とか「うー……んん」とか暫く悩んだ後、「気にしてなくていいぞ」と肩を叩こうとして、思い悩み、やがて腕を降ろしてしまった。その気遣いに「ありがとうございました」と赤目は返しながら、しまえと指示が来たドラグノフを丁寧にしまっていく。

真田三尉が肩を叩かなかった時に、赤目は拳を握っていた。白く白く、肌から血の気が失せる程。

それを僕は、見なかった事にした。

昼食をはさみ午後は、赤目ではなく僕が試される番らしかった。赤目とは別行動となり、僕は座学の教室へ、赤目は射撃訓練へと赴いた。

基地内部において座学を受ける者はあまりいない。士官候補生や特殊な免許を必要としている者だけが受けるからだ。日本における「誰もが受けられる平等な教育」は既に崩壊しており、とびっきりの金持ち及び、とびっきりの天然物頭脳、これらのうち片方がなければ中学校以上の教育は受ける事が出来なかった。が、である。軍部に入り士官候補生コースに入ると、無償の上給料をもらって勉強を教わる事ができる。これ目当てに軍に志願する者も多いとかなんとか。

羽貫貞弘はその手の人間であるようだった。あの時立ち上がった二人のうち、軍帽を被っていた方である。

僕が教壇に立って怪についての基礎知識から、考察までを黒板に書いていると背後からちょいちょい「質問！」という声が上がるのだ。八割は羽貫であり、一割は羽貫に対抗意識を持っているらしいあの坊主頭であり、最後の一割はそれ以外だった。この座学は希望

者全員が受けられるようになっているらしく、立ち見も少なくない。
「質問！」
はいはいと手を挙げているのは、振り返って見ればやはり羽貫で、
「何ですか？」と問い掛けると彼は一瞬で喜色満面になり「骨型の怪は脊椎動物を真似ますが、その体が従来のモノに比べて格段に大きくなるのは何故ですか？」なるほど、なるほどと頷きながら僕は黒板に細かい網目のような物を二組書き込んだ。
「こちらの、」とんと左側の網目を小突く「網目の細い方が従来の生物の筋線維だとしましょう」続いてもう片方の「網目の細かく太い方が怪のモノです」網目を逆手で小突く。そしてから一度深く息を吸い考えをまとめ、
「単純に言って筋肉の密度が違うからです。密度差はおよそ四倍ですが、筋力はそれを上回ります。また、彼らには巨体を維持するに必要なある物が必要ないため、このように巨大化する事ができ、我々を攻撃する上において有効だからそうなった。と考えられています。さて、必要ないあるもの、とは何でしょう？」
ぐるりと皆を見渡すと、七割くらいの人が目を逸らした。答えられないからではなく、目を合わせたくないから目を逸らしたのだろう。知識は欲しい、だがお前はいらない。そう見て取れる態度だった。
「先生ィ、はいいいいいいいいいいいいいい！」「長田、うっさい」
羽貫に窘められながら、元気のよいガキ大将のように手を挙げているのは、赤目につっかかっていった彼――長田実篤という名前らしい――だった。
「飯だ！　アレだ！　いや、答え言ったな！　だからアレです。飯が必要ないからです！」
「正解。それと僕は先生じゃないので、普通に弘中か和人と呼んで頂けると嬉しいです」
そう返すと教室の左後ろの方から「人間兵器って呼んでもいいスか？」という声が聴こえた。

「もちろん」
そう至極まっとうな顔をして返すと、問い掛けた彼は気持ち悪そうに僕を見て、やがて目を逸らした。その事について残念に思いながら黒板にエネルギーと大きく書く。
「エネルギーは生物の活動に必要不可欠なものです。では、もしもこのエネルギーの補給を必要とせず、ただその時戦う為の生物がいたとします。これが怪です。消化器系を最初から持たず、体の内にあるエネルギーを使いきるまで活動し、その後止まる。この利点が彼らの巨大な体を支えています。例えば白亜紀の恐竜、首長龍は一日に数トンの食物を食べて体を維持したと言いますが、その半分ほどとはいえ巨大な怪はその餌の入手が必要ないんです。最悪の場合自食作用（ファジート）も使うという報告もありますし、体内でニトログリセリンを生成して爆発した。なんてこともあるらしいです」
つまるところ、
「生物と見る事のできる体をしてはいるが、地球上にいるどんな生物の型にも当てはまらないということです」
「質問！　ならば何故、骨型、蟲型、無形とわけられているのですか？」
「進化の方向性がそれらのどれかに所属しているからです。例えば、日本において初期の怪は非常に水分が多く、弾丸では致命傷を与えにくかった。その為に火炎放射器等が使われたわけですが、その初期状態、原生期と呼びますが、原生期を過ぎた辺りから怪は二つのタイプにわかれました。背骨の様な物を持ち、動物に似た形をとる骨型。昆虫に似た形をとる蟲型。余談ではありますが、骨型の進化の途中に猿はでましたが、人間はでていません。これは一体何を意味するのでしょうね」
時計の針が四時を指し、僕に与えられていた講義の時間が終わった。僕が下げた頭に、数人が礼を返した。

所在　三（後書き）

多分、私が書いてきたものの中では話の立ち上がりが割に早い物と思われます。

今暫しのお付き合いが頂ければ、幸いです。あと敬語コレであってますか？

所在　四

講義に出ていた組と、外で訓練をしていた組。
これらを見分ける時に非常に有効な方法がある事に気付いた。夕食の時、どちらかというと僕を盗み見ているのが講義に出た組、赤目を見てかなり腰が退けているのが外で訓練をしていた組。赤目は何かをやらかしたらしいが、素知らぬ顔をして味噌汁を飲んでいる。
「えー、っと。弘中さんでいいんだっけっか？」
唐突にかけられた言葉に僕は驚き、赤目も驚き、幾人かの兵士がむせた。声をかけてきたのは案の定羽貫貞弘だった。階級は軍曹。彼は切れ長の瞳を好奇心に輝かせながら、僕が返事をするより早くに言葉を繋いでいく。
「もしかして、数学とかってできたりします？」
「一応……」
「関数って解けますか？」
「一次？　二次？　三次？　それともベクトルが混ざったもの？」
「……関数って、そんなに種類があるんですか」
「物理を勉強するならさらに増えるよ？」
うぉー、と机に頭をついて唸る羽貫軍曹。年の頃は２０を少し過ぎたくらいだろう。日に焼けた体にしなる筋肉が絡みついている。やがて復活した羽貫軍曹が「二次関数でこれ、三角形の面積を求めろっての。自分でやってみても答えがあわなくて」とノートを取り出して僕に見せた。わら半紙を綴じて作った、お手製のノートにはビッチリと公式と数式と図が踊っている。問題を見てみると、三角形の面積を求める式の最後を２で割っていないだけだった。
「マジか……」
検算をしてあっている事を確かめた羽貫軍曹はまたしても頭を抱えて唸る。それを見て向かいの席に座っていた長田軍曹が「馬鹿でぇ」と笑う。滅茶苦茶笑う。広間に反響するほど笑う。上官に殴ら

れて止まる。
「黙れ長田。一次式のxが求められない脳みそプリンは黙ってろ」
「あ？」
いがみ合う2人。反応しない周囲。どうやらコレは僕達がくるまでの、基地での日常らしかった。やがて羽貫軍曹が長田軍曹から興味を失くしたように僕に向き直り、今度は怪について質問を始めた。
「骨型の中で日本に多いのは犬に似たタイプじゃないですか。何でだと思います？」
「答えが出ていない質問だね……。一概にそうとは言えないけど、彼らの進化は僕らを辿っているんだと思うよ」「辿る？」「そ」
頷いてから口の中に残っていた米を嚥下し、
「進化の速度が異常なんだよ。本来生物は何百年も何万年もかけて生態や姿を変化させていくのに、彼らは原生期からわずか２０年で僕らの付近。プラスマイナス数万年まで追いついた。その進化の速度ははっきり言って、自己進化ならばありえない速さだ。つまるところ――これは僕の推論で自論だけど、彼らは周囲の生物に学んでいるのではないかな？」
「学とは、具体的に？」
「例えばサバンナの辺りでは象皮を持つチーターのような怪が確認されている。これはそこに二種類の生物がいたからだよね？　現に日本では確認されていない。その代り日本において日本特有の生物の姿で現れる怪の数は、非常に多い。生物の姿といっても、色々違うんだけどね。これはつまり、怪が周りの生物の進化を真似ているということではないかな？」
なるほど、と一つ頷いてから「だから今日の講義の最後に、人間は真似られていないって言ったんですね」と納得している。
「おい、それは人間が真似るに値しない生き物だってことか？」
恐らく広間の中央付近、僕からは見えないその位置で声が上がる。

「値しないとは言ってませんよ？」
見えない誰かに小首を傾げて答えると、
「ならば何故、人間が真似られていないと言う発言をした！」
ガタンと椅子を鳴らして立ったのは、五分狩りでキツイ目をした３０代の男だった。確か座学にも出ていた筈だ。「佐々かよ」「人類至上主義到来か」「今だけ応援してやる。がんばれー」それらの声援に鼻を鳴らし、
「本官は愚行するが、人間兵器殿は本当に人間を守ろうとしているのか？」
「もちろん。それが作成された目的なので」
佐々という男の言葉に同意するような雰囲気を出す兵達が、僕の言葉に苦い顔をする。
「ではなぜ、人間は真似られていないと言ったのか。その意図をお話していただけますか？」
「話すも何も、事実ですので。未だかつて人間を模倣した怪は出ていません」
ご飯も味噌汁も食べてしまった。たくわんをポリポリと噛みながら返す。
「人間を真似るプロセスがまだ発生していないからだと思いますけどね。今のアナタの口上は意図不明で、ただの憂さ晴らしのように思えます。静かに食べましょう」
視線の先で、佐々という男の何かが切れた。気がした。佐々が一度大きく深呼吸をして、こちらをねめつける。貧乏ゆすりが酷い。
「幾つか質問をしたい」
「どうぞ」
「まず一つ。人間を真似する必要性とは何か。二つ。怪の存在目的とは何だとお考えか。三つ。アナタは人間が怪に勝てると思っているか」
そこで言葉を区切る佐々。僕は食べ終わってしまった夕食の盆をぼんやりと眺め、透明なプラスチック製のコップに入っている水を

二口飲み、
「アナタの疑問の答えは一つに行きつきますね。僕の中では、ですが。長くなりますが、よろしいですか」
　黙って頷く佐々。止められる筈の上官たちは黙ってこちらを見ている。全員が僕を見た。
「怪の存在目的は、彼らにインタビューした人がいるわけではないので正確にはわかりませんが、人間の数を減らすないしは絶滅させること。もしくは何らかの物体の破壊ではないでしょうか。人間を減らすだけなら、日本で言えば富士山周辺に出現場所を選ぶ必要はなく、また何らかの破壊目的ならばそれを達成すればいいだけです。結局わからないわけです。さて、」
　首をコキコキと鳴らして、ついでにのびもする。それを佐々が苛立たしげに見ている。
「人間を真似するプロセスが発生するのは、彼らが本当に人間を滅ぼそうと思った時でしょうね。ドルトンの悪夢は必要に迫られたから、人間の使う兵器を真似した。というところでしょうけど……。東京第一次怪災を知らない人はいますか？」
　いる筈がないとわかりつつも、確かめる。
「未曽有の大災害となった東京一次怪災ですが、実際に怪が襲った人間は４万人程と言われています。ですが、被害者の総数は７万人、行方不明者は４０万人にのぼります。ぶっちゃけ、パニくって人が人を殺しちゃったんでしょうね。公にはされてませんけど。怪を追って東京についた軍ですが、これの死傷率もまた凄い。５割を超えている。部隊で言うなら全滅です。ところが不思議な事に、彼らの死体は身ぐるみが剥がされている場合があった。綺麗に。コレ、一般人が銃器を奪って撃っちゃったんじゃないですか？」
　投入された軍は総数２万８０００。即時召集できる全てが集められた。このうち２割が怪と戦って死亡したとされ、残りの３割は何故か死んでいる。彼らが持っていた弾丸の総数は一体何発になるのか。なまじ、怪が現れて２年が経過し、国民に銃の使い方をレクチ

ャーしていたりしていたのが、まずかった。
統制される代わりに安全が保障される筈だった。
だから我慢していた。
キャリアが消えて農作業に従事した。
自由が削られて、命と引き換えに我慢した。
贅沢に慣れきった生活が急にみすぼらしい物になろうとも、生命が保障されるなら、と。
だが、怪はきた。目の前で人を潰している。後ろからついてきた軍は、都民が退避するまで中々撃てない。
なんだそれ。
なんだ、それ。
なら、俺が撃つよ。私は逃げる、あ！　轢いちゃ……。痛ぇ！
誰だ今撃ったの！　軍か？　何やってんだよアイツら、俺の方が上手くできるっつーの！　一人二人殺してもいいから、さっさと化物止めろよ！　軍に誘導された先に怪いんじゃん！　どうなってんだよ！　おいおいおいおいおい！　何だコレ、とまんねーよ、とまんねーよ！
「怪とは何なのか。当時は何もわからないに等しい状況だった。東と西に物流が寸断され、地下の輸送手段が確立されるまで日本は混乱を極めた。正直、怪が殺した数より、怪が現れたという事が原因で始まった何か、あるいは止まった何かの所為で死んだ人間の方がずっと多いですよ。数十倍、数百倍。だから、怪が人間を真似たら、もし、恐怖というものを理解できたら、まずいかもしれませんねー。だって僕ら、常に王手をかけられてるんだから」
「……王手？」
全員を代表するかのように、羽貫軍曹が問う。
「かけられてるんですか、王手」
「ガッチリと。だって僕らが怪を止めていられるのは、怪が今の姿だからじゃないですか。もし、怪がドルトンの悪夢と同じ戦法を取ったら、どうします？　彼らは既に、できる、ということを示して

いる。進化にしたって、それぞれの出現場所から現れるのには、その地域だけのメモリーというんですか……。特徴を持っていますよね。どうしてソレに、他のメモリーがプラスされないと言えるんですか。敵は何もないところから現れます。なら、情報の輸送くらい容易いんじゃないですか？　具体例が少ないため、またドルトンを例にとりますが、もし、怪が、ホスゲンやサルファ・マスタードが他の人間にも有効だと気付いたらどうしますか？　あの中和国周辺は国を捨てて逃げましたよね、彼らが止めようもない化物になってしまったから。そのエネルギーが尽きて進めないラインまで、土地を放棄して逃げた。もし仮に、怪が巨体を捨てて小さくなられたらどうしますか？　大気に舞うウイルスを真似て、人類が出会った事のない病原菌になられたらどうしますか？　致死率が高かったらどうするんですか？　もう一体、幾つの王手がかかってるのかわかりませんよ」

ただまぁ、と一呼吸置いて。

「人間を真似られるのはやっぱり怖いですねー。怪の行動は個々がバラバラで、好き勝手に動くから対処出来ているわけですよね。もし、コレが囮を使うようになり、隠し玉を持つようになり、戦術的に動くようになったらどうします？　世界規模でコンタクトをとって、人類の戦局を動かしにかかったらどうします？　だから別に僕は、人間を真似ていないということで、人間に真似る価値が無い、と言いたわけじゃないんですよ」

むしろ、真似られたらマズイと思っています。

そう残して僕は盆を片手に立ちあがり、慌てた様に赤目が続いた。誰も話さない。誰も目を合わせない。羽貫軍曹のようなタイプは、やはり稀なのだろう。まだ食事の終わっていない兵の横を通るときに「物は黙って使われてりゃいいんだよ、御高説たれてんじゃねぇ」と吐き捨てられた。

「そうですね。そうありたいから、ただ飯ぐらいじゃ困るんです」

東中基地司令はさっさと夕食を食べ終わり、とうの昔に広間から

姿を消していた。あのトドのような体で迅速に動くものだ、と感心する。
「だって、使って貰えなかったら、僕ら、所在がないですもん」

その夜、僕らは襲撃された。
真田三尉の隙をついたのか、それとも真田三尉が手を貸したのか。それはわからないけど、とにかく扉が開いて、顔を訓練用のガスマスクで覆った男4人に僕らは襲撃された。手始めに眠っていた僕の腹が力任せに殴られ、胃の腑がひっくりかえるような衝撃で僕は目覚めた。目覚めると同時に、やはり来たか、という思い。頭を膝につけ、腕で体を覆いながら「赤目！　基地司令か誰かを呼んで来い！」と口の端から胃液を垂らしながら叫んだ。赤目からの返事は無い。2段ベッドの上に上がった男が「……誰もいねぇじゃん」と零す。男たちの襲撃に気付いた瞬間に赤目は既に部屋を飛び出していたらしい。
殴られてどのくらいの時間が経っただろうか。既に手足は麻痺していて動かせそうにない。僕に馬乗りになった誰かが「道具は！　道具らしく！　使われて！　いれば！　いいんだよ！」と一言区切りに僕を殴る。殴る。殴る。
不意に、衝撃が消えた。それどころか僕の上にあった重さも消えて、
「真田三尉、基地司令殿、並びに高官の方々はどうしたらいいかわからず固まってしまったので戻って参りました。処罰を覚悟で反抗します」
薄目を開けると、既に3人の男が両肩を有り得ない角度に曲げて蹲っていた。
「速いよ……色々と。いや、遅いよか」
赤目が僕の上に乗っていた男を組み伏せて、右腕を両手で持ち、体を密着させながら曲げていく「お、ぉ、ぉおあぁ、あああ折れ！　折れる！」声からして、夕食の時の佐々という男か。「ま、まっ

て！」ゴキリと肩が外された。

暗い部屋の中、赤目の目が、名前通りに赤く光っていた。

所在　四（後書き）

キャラ出し過ぎかしら、と反省してみたり。
読みにくくなってないかと、物凄く心配してみたり。

なにかありましたら、気軽に感想を、結構厳しい感じでくれると助かります！

所在　五

三笠寛人は目の前に座る男を見て露骨に嫌そうな顔をした。
三笠の反応を見た男は意地悪そうに笑い、無精髭だらけの顎を撫でまわした。まったくインテリには見えず、むしろ雪男とかそんな感じの雰囲気を放ってはいるが、男はれっきとした科学者で、しかも世界トップクラスの頭脳を持っていた。
「で、本当なのか？」
「おうともよ」
ずかずかと三笠に与えられている部屋に上がり込み、三笠秘蔵の天然物の干した豚肉を勝手に食いながら、
「あいつらは設計された子供なんかじゃねぇよ。孤児を拾って来たり、提供者を募って得た子供だよ。それをちっくら脳みそ弄ったり、体弄ったりしただけ。どっちかっつーと、サイボーグに近いかもな」
ナハハハハハ！　と笑う男の唾が三笠に降りかかる。一瞬三笠の背後に怒り狂うカマキリが幻視された筈だが、男は気付かない。ナハハハハハハハ！　と笑い続けている。
男は小田切一馬という。１８年前、人間兵器を作る計画が上がった時、その必要性を解き、強引に軍部にオーケーさせ、計画を作り発進させた男。それが彼だ。放浪癖の気があり、半ば実験室に幽閉されているが、三笠が来たことをどこからか知ると彼の秘蔵のコレクションを彼の前で食す為に現れる。対価として様々な情報を置いて行くが、三笠的に言うと、むしろマイナスである。もたらされる情報が主に三笠の仕事を増やすからだ。
「それを何故今、私に話すんだ？」
げんなりしながら三笠が問い掛ける。すると小田切は口を開きかけ――携帯を白衣の胸ポケットから取り出して電話に出た。私の携帯にも同時に着信。時折、「やっぱり」「時期的になぁ」とかうんうんと頷いている。やがて電話を終えると「噂をすれば影だな」と

笑った。
「富士宮基地に配属したろ、あいつら」
「ああした」
「現場の兵士に襲われたらしいぞ。んで、赤目の方が４人全員の肩を外して、向こうの司令部はてんやわんやの大騒ぎだそうだ。さて、と。やるべき事がわかったかね？」
小田切が言うのに合わせて着信したメールを読むが、大筋同じ事が書いてあった。
「何がだ、何」
「まぁ確かにー、アイツらの倫理観外した方が戦場で使いやすかろう、と彼らの存在意義を捻じ曲げたのは俺だけどー。でもでも責任は俺だけが被るんじゃなくて、資金を調達してきた三笠っちも被るべきっていうかー」
頭に握り拳をあてて「てへ☆」と笑う男、小田切一馬。見た目は雪男。三笠の胃に言い知れぬ冷たい物が落ちた。特に「三笠っち」の辺りでは全身が総毛だった。
「因果な子供を育てたな、お前」
鳥肌の立っている腕をさすりながら言うと、小田切は、
「馬鹿言うなよ。そうするしかなかったから、そうしたんさ。万が一クローン化の話が間に合った時、倫理観なんてあったらマズイだろ？　目の前にもう一人自分が現れて、狂って死にましたじゃいけねーんだよ。ソレも自分だ、って納得できるように、最初から狂わせておくしかないんだよ。それにな。アイツらが実際、軍を裏切ったらマズイぜ。特に頭脳特化が既にいるっていうのがマズイ。周辺基地４つくらいは２人で落とすぜ？」
「まさか」
そう言って三笠は笑うが、小田切は笑わない。ただ黙って三笠の秘蔵コレクションを一口食ってはポイと捨てる。その行為を繰り返し続ける。近年、豚や牛など滅多に生育されないのを知っていながらの行為である。三笠がいつ怒るかを楽しみにしているのだ。

いつまでも三笠が怒らないのを感じ取り、残念そうな顔をしながら食い散らかした干し豚肉の処理を始める小田切に、
「まぁ、私が動いて基地に話を通す事はできるが……。時期が悪いにも程があるだろ。どうしてもっと早くに言わない？」
「報告書に書いたと思ったんだよ。そしたらほら、報告書が俺のデスクの上にあってな。思わず周りのやつと一緒に高跳びを企てたよ」
クシャクシャになった紙を三笠の前に差し出す小田切。小田切が言った通りの内容が紙には記載されていたが、日付は今から１７年前のものである。三笠の顔から表情の一切が消え、能面の如き顔で小田切を見る。この事が軍上層部に知れたら、二人の首ではすむまい。一体何人の人生がかかっているプロジェクトだと思っているんだ。
小田切はまたしても頭に拳を乗せ、「てへ☆」とやった。
小田切一馬も天才であるが、三笠寛人もまた天才の一人である。切れ者中の切れ者である彼は、初等教育を受けただけの叩き上げでありながら、３０代前半にして軍部の一佐まで上り詰めた。決して甘い男ではないし、脅して従わないなら脅しを実行する。剃刀のように細めた目からは小田切への殺意がありありと見て取れるが、不意にそれを消した。
小田切を殺せば日本の防衛が３％は難しくなる。それがわかっているから殺さない。
「壊さないでくれよーアイツら。アイツらが必要なのは平時の戦場ではなく、戦場が大きく乱れた時なんだからさ」
三笠は黙って小田切を見つめている。早く帰ってくれないかな、と思いながら見つめている。

所在　五（後書き）

今更ながらにまどマギ観たのですが、物凄く面白かったので真似してみたい。魔法少女出してみたいマミりたい。さて、どうやってココから魔法少女物に変えていくか……。止めた方がいいと理性は言うけれど、こう、情熱がね？

人間　一

人間

不思議な事に、昨夜あれ程の騒ぎを起こした僕らに処罰は下らなかった。むしろ佐々達襲撃者にだけ減棒が告げられ、まるで軍部が僕らを守ったかのような状態になっていた。

昨日の騒ぎは後半から基地内部の者が野次馬として押しかけた為、半ば周知の事実となっており、その処置に納得のいかない者達が上官に直訴し、上官は上官で困り果てた顔をするといった状況だった。

さらには、その日の訓練と講義を終えて部屋に戻ってくると、扉が内側からも鍵がかかる仕組みとなっており、赤目と僕に密かな感動を与えた。生まれて初めて、他者から侵害されることのない、自分たちの部屋が与えられたのである。赤目がロッカーを開けると、いかにも急場で揃えましたよサイズわからないので適当に買ってきました、という体ではあったが、女性用の下着なども用意されており、赤目は暫く呆然としていた。夜間のトイレの使用に関しても、僕がＬＡＮで真田三尉に連絡を取れば連れて行くという至れりつくせりの大判振る舞い。夜間に入ったらペットボトルの水とＬＥＤライト二つも支給された。罠か？　上げて落とすのか？　その日僕は眠ることができなかった。

騒ぎから一週間程経った日の夜。

羽貫軍曹がお手製ノートを片手に僕らの部屋にぶらり、と現れた。赤目があからさまに警戒する中、羽貫軍曹が今度は社会について教えてくれ、と僕に言い、僕は羽貫軍曹に知っている歴史の流れを話させて、それを補完していくという形を取った。やがて大まかながら歴史は近代史に入り、そして今現在から１０年ほどまえの辺りまで来た。

「この頃、地下輸送手段……名前なんでしたっけ？」

「名前はないよ。正確にはあるんだけど、開発担当者がガンガン変わって、その度にプロジェクト名が変更されたからいつの間にか地下輸送手段って定着しちゃったんだよ」
「って、どういう仕組みなんですか？　日本全国の地下にレールを作ったってことしか知らないんですけど。日本って地震ありますよね？　大丈夫なんですか？」
「大丈夫も何も、２０００年よりも前から東京の地下は網目のように地下鉄が走っていたらしいよ。ただまぁ、地下輸送手段は恒久的に、それこそ命綱だから持久力が求められてね。基本的には穴掘ってコンクリートで固めて、なんだけど、要所要所にカーボンナノチューブを挟んで地震によって発生するズレを軽減するらしいよ？　そっちはあんまり専攻で習わなかったけど……。軍の物質移送にも噛んでるし、迅速に物質を運ぶコレのお蔭で、足りない人員をやりくりして怪とやりあってるわけだから感謝感謝だよ。噂では軍の兵器の試作工場も地下にあるとか。あぁ、内緒にしときたいやつね」
「またまたぁ、弘中さん冗談も言えるんすねー。地下でやらなくても、空いてる土地は死ぬほどあるでしょ」
　にこやかに笑いながら羽貫軍曹はお手製ノートに今習った事を書き込んでいく。数回に渡って「弘中さん、さんやめない？」と言っていたのだが、つい先日了承したと思ったら次の日「弘中様！」や「弘中殿！」と広間で呼ばれ、人間兵器が洗脳を開始したぞ、と騒ぎになったのだ。それ以来僕は名称を直すのを諦めている。

　羽貫軍曹が「んじゃ、また明日！」とにこやかに笑いながら僕らの部屋から退場し、消灯時間になって電気が消えると早々に、
「あの人と随分仲がいいんですね」
　と赤目が拗ねた様に言った。
「仲良くしてくれるなら、それが一番じゃない」
「最近、広間でも部屋でもあの人くる……」
「僕らが受け入れられてる証拠じゃない」

「僕『ら』じゃなくて、和人さんだけですよ。私は相変わらず誰にも挨拶されませんし、怖がって誰も触れませんし……」
上でもぞもぞと動く音がする。
「怖いですか、私」
ともすれば聞き逃しそうな声量で、赤目が言う。
「触ったら何か感染るみたいに、避けられるんですよ。研究所で私を人間扱いしてくれる人はいなかったけど、皆触れてきたのに……。注射の時とか、何か理由がある時だけだったけど、それでも、触ってくれたんです。良い結果が残せれば頭を撫でてくれて、目の手術の後、1度何にも見えなくなって凄く怖かった時は、誰かがずっと手を握っててくれたし。なのにココでは誰も私に触れないんです」
赤目が2段ベッドの上で嗚咽を漏らし始める。嗚咽を漏らしながら、涙声でそれでも訴える。
「私は自分の事を人間だって思ってます。だけど、皆はそう思ってくれないんです。ねぇ、和人さん。眠っちゃいましたか？」
「起きてるよ」
闇夜の中、見開いた視界は閉じていた時と同じ。上官としてこういう時は慰めてあげるべきなのか、それとも叱咤するべきなのか。この手の事は習わなかったからよくわからない。よし怒ろう、そしてフォローしよう。いけるいける、頭脳特化の僕なら会話を上手くまとめらるくらい余裕。さぁいくぞ。待て、はやる気持ちを抑えろ。最初は何て言えばいいんだ？　おはようございますか？　いや、おはようの時間じゃないぞ。落ち着け、落ち着け自分。そうだまずは素数を数えて心を無にしよう話はそれからだ。
「本当に起きてますか？　眠っちゃったんじゃないですか？」
「2，3，5，7、11，13、17，19、23、29，31……」
「眠ってるじゃないですか。意味わかんない数字、寝言ですか？」
心を無に帰している僕には何にも聞こえていなかった。そっと二段ベッドから降りた赤目が僕の手をきゅっと両手で包んだ事にもま

ったく気付かず素数を数え続け、１００を超え、３１３を越し、気付いたら眠っているという……。

人間　一（後書き）

変身シーンとかどういう感じにするか決めたけど、大きな大きな問題が一つありまして。

……どこで変身させたらいいんだろう？　ココからだと、確実に浮く。

人間　二

フォロー？　ええ、任しといて下さいよ。研究所では「人の傷口を素知らぬうちにほじくりかえす」「地雷原を踏破し地雷を踏み切る」「天然を超えて悟ってる」等と会話術においては数多の表彰を受けた僕ですよ？　僕の成績がグリングに負けたのは会話術とコミニーケーション能力だけだったけど、見る目がないとしか言いようがない。グリング、研究員いないときに「禿げ、禿げ、デブ、デブ！」って繰り返し罵ってましたから相当性格悪いですよ。天然のグレーテルに対して計画性のグリングって、何故か僕同列どころか各上でしたけどそれって絶対何かの間違い――……

「……は！？」

凄まじい量の寝汗と共に目が覚める。窓がないせいで今が何時かはわからないけど、多分午前3時くらいだろうとぼんやりと考える。

「ふぉろー、フォローしなくちゃ……」

寝ぼけている所為か、夢の続きを口走ってしまった。

それにしてもやけに左半身が熱い。なんだこの熱の塊。右手で触ってみると妙に柔らかい。支給された毛布はこんなに柔らかくなかったし、質感も違う。そもそも夜間熱いから僕は毛布を使っていない。するとコレは何だ？　夢の続きか？　いや、確かに脳は覚醒しているし……。

右手でペタペタとソレを触ってみる。細くてさらさらの糸の辺りから、手を横にすー、と動かしていくと滑るような肌の質感があり、玉の汗が浮いていると思しき感触がある。さらにその辺りをまさぐっていると小さな穴があり、そこをいじくっていると塊が少し跳ねた。塊の辺りから熱い蒸気が噴き出してくる。コレ以上部屋を暑くされたらたまらんと、手をそこから離そうと動かすと、布と皮膚とに右手が絡め捕られ、動かなくなった。

「……ぬ？」

オカシイ。コレは確かに肌だと思うのだが、僕の肌には触れられている様な感触がない。なんだろう。僕の細胞が暴走して皮膚だけを伸ばしてしまったのかな？　いや、一日足らずでそうそう体積が増加するとは思えない。するとコレはアレか。電脳の故障で、ないものに触れているわけだ。触れている感触だけある、幻触というやつか？　するとコレ、実際は何も触っていないわけだ。さっさと右手の戒めを解いてもう一度眠ろう。

「よいしょ」

布を裂く様なまやかしの感触を得て、自由になった右手に満足して僕はもう一度寝入った。もう眠くて眠くて仕方が無かった。

電灯が付くと同時にサイレンが鳴る。いつも通りの起床だ。僕は目を開け、開け、何故だか赤目と目を合わせた。赤目が驚いた顔をする。何故驚く、明らかに僕が驚くべきところだろう。だってココ、僕の寝床なんだから。とりあえず起きて部屋を片付けないと真田三尉に叱られる。赤目と僕は同時にそう思い立ち、赤目と同時に腰を起こし、二段ベッドの下で向き合った。

赤目は随分と変わった服を着ている。首の回りと背中にだけ布地があり、それ以外のところは破けてボロボロだ。下にはいているのは迷彩服をかなり折り返して裾を短くしたもの。なるほど。ズボンはともかく、シャツは斬新だ。新進気鋭のファッションといえるだろう。だが、こんな服果たして支給されたろうか？　されてないだろう。お手製か？　どやされるぞ。しかし、赤目はいつまで僕の左手を抱いているんだ？　暑苦しくてしょうがない。そして妙に柔らかい。というかこの熱さ、何となく覚えがある。昨日の夜に夢でこんな熱さに襲われたような……はて？　電脳がどうたらと考えた様な。

赤目は僕の視線を追って自分の体を見た。僕を見る。また自分の体を見る。ゆで蛸のように真っ赤になって僕の手を持ったまま後ろに飛ぶ。手を引かれた僕は引きずられて前に動き、ベッドの敷居に

思いっきり頭をぶつけた。
「い！」
頭の中でお星さまが白い光と踊ってる……！　赤目は何故僕が頭を敷居に打ち付けたかを不思議そうな顔で見、その後自分が引きずった所為だと気付いて慌てて手を離した。すると今まで僕の手と赤目の手で隠れていた体の大部分が露わになり、日の当たる部分ではないところは真っ白な赤目の肌、腕や腹との色の違いが美しい。赤目は慌てて双丘を手で隠して「あ、あ、あばば！」と一声残して自分のロッカーに飛びつき新しいシャツを取り出すと梯子を駆け上がってごそごそと服を着替えた。こと、ココに至ってようやく僕は起き上がり、赤目を置いてさっさと布団を畳み、直立不動で真田三尉を待っていた。
……オカシイ。アレから大分経った。なのに真田三尉は未だ現れない。ただノックの音だけが響き続け「何かあったのか！？」とか「中で何かあったらしい！　強制開錠するぞ！」などと叫び声が聞こえる。
「鍵！　鍵開けないと！」
ようやく着替え布団を畳んだ赤目が叫んだ。僕とした事がうっかり、朝のハプニングのせいでパニックを起こしていたらしい。頭脳特化として致命的なミスだと思いながら僕は鍵を開けた。
「どうした！？　何があった！？」
真田三尉が血相を変えて飛び込んできた。そして周りを忙(せわ)しなく見て異常がないか確認している。すると、僕が握っている布地に気付いたらしく、「それは？」と声をかけられ、そこに至ってようやく、自分が布団を畳む時にも決して離さず握っていたらしいソレに気付き、ソレをしげしげと眺め「シャツの……切れ端でしょうか」と答えた。
「ブ、ブラ、ジャァ！」
後ろで赤目が慌てた様に言い僕の手から布地をひったくった。なるほど、アレがブラジャーなるものか。なるほど。しかし何で僕の

手にアレが？　手をわきわきと動かしてみる。さっぱりわからない。
「この部屋の最高責任者である弘中和人軍曹に訊く。何があった？」
とすると昨日のアレは夢ではなく、本当にあったことで？
「昨日の夜赤目二等兵に深夜襲われまして、その時は電脳の故障かと思って眠ったのですが朝起きたら赤目二等兵が上半身裸で何故か隣で寝ており、その後赤目二等兵に顔をベッドの敷居に叩きつけられ、今に至ります」
「どうも要領を得んな……。何があったか、何が起こったかについて説明せよ」
「確かな事はよくわかりませんが、僕と赤目が隣り合って眠り、僕が赤目のブラジャーをはぎ取ったのは確かでしょう」
真面目な顔をして話しているのに、真田三尉は何故か頭を抱えた。そして「問題ばっかりだ……」と漏らす。真田三尉の後ろでは何故か異様な熱気が異様な盛り上がりを見せ「女かぁ、何年見てないよ？」「俺もう、人間兵器とかどうでもよくなってきちゃった」「男と女と密室。化学反応で何が起こるか考えてみろよ」等と言う話声が聞こえてくる。横目で盗み見ると赤目は真っ赤になって「あばば」「ふにゃぁ！」等と要領を得ない言語を発している。新手の暗号か？　頭脳特化を欺けるとでも？　しかし要領を得ないな。それはそれとして、ココは自分がしっかりせねば。まずは昨日から今までを思い出して……
記憶を反芻した瞬間、鼻血が噴き出た。

人間　三

「で？　えー、っと。研究所では男と女のアレやソレ、習わなかった訳だ」
「失敬な。頭脳特化の兵士にそんな漏れは有り得ません。非常時には知識の全てを入れた人類最後の」「小田切か？　あの馬鹿がそういう風に君を育てたのか？」「いえ、常盤という方です。小田切さんは時たま現れるくらいでした。知り合いですか？」「アイツは有名だぞぅ。それで、何。結局男と女のアレとかソレは知らないわけね？」「だから失敬な！　上官でも怒りますよ？　習った限りでは、おしべとめしべ説、コウノトリ説、キャベツ説、があります。そんなに判然としないもので人類の繁殖は大丈夫なのか、とペア全員で問い掛けた所、小田切さんが何やらビデオを持ってきまして。『教本だ、ナハハハハハ！』と笑いながら上映しようとしたところ、他の研究員に袋叩きにされ、『研究結果に支障をきたしたらどうするんですか！』『二次成長については必要最低限だけ教えて、後は情報封鎖ってなったでしょう！』等と責められまして。泣きながらビデオを守っている姿が実に哀れで、この人本当に頭が良いのか疑」
「わかった、もういい。何も知らないということがわかった」
失敬な、と返す前に痩せ細った老医は内線で何処かへと電話をかけた。「まだ知らせない？　あぁ、ずっと秘密でいくんですね、はい、はい」「いやー、普通の男部屋に叩き込めば何とかなると思いますよ。下品になりますけど」「結局誰が教えるんですか？」「私？　無理無理、だってアレでしょ。赤い目の方……赤目っていうんですか？　アレにも教えるって、何をどう教えるんですか？」「だって結局」等と随分長い間話し込んでいたが、疲れ切った様子で僕を振り返り、無理やり笑った。
「えっと、それで昨日はいれたの？」
「何を？」

親指をスッと上げ逆手で作った穴を突っつく動作をする老医。指を何かにいれたかを聞いているのか……。つまるところ、それは
「穴、ですか？」
「そうそう！　何だ、意外とわかってるじゃん！」
やはりそうか。ならば答えるべき言葉は、
「いれましたよ。何だか跳ねて、物凄く熱くなってました」
「……ぁあ、そう。避妊なしかぁ。コレって、女性の医師呼んだ方がいいのかなぁ？　万が一着床してるとこまるよなぁ。というか、子宮あるの？」
ほっとした顔が一瞬で地獄の最下層まで落ち、老医が頭を抱えてデスクの上でうぉぉぉと唸る。
この時、赤目と弘中和人だけが知らないだけで、基地上層部では彼らの処遇についてどう扱うかを決めかねていた。昨夜の騒ぎを報告した結果『できうる限りのサポートをしろ』という旨の通達が届いた。軍上層部が決めた事だからしょうがない。なんとかする。だが、当初は道具として使えといっていたのに、何故今になってソレを撤回したのか。会議は混迷に混迷を極め、上官達の目の下にはクマが浮き、上官の異様な気配を察して他の兵士も静かになる。そうして対策を考えている時に事件である。上層部は揺れに揺れた。このまま二人を一緒にしておくのはマズイ。だが、別の部屋にいれるのも色々と問題がある。やむをえない、二人を別々の部屋にしろ。下された決断。しかし。大変です！　赤目が号泣しました！　なにぃ！？　和人さんが一緒じゃなきゃ、嫌！　と泣いています！　会議室が静まり返る。男と女か……。理解を超えますね……。誰かが呟いた。
こうして部屋割りの問題はさらに迷走を深める事となる。
この問題が空騒ぎに終わったのは、別の基地から女性医師を呼んで何も無かった事が確認されてからである。
また、ここにおいて赤目の知識も弘中和人と同レベルと知れ、二

人にどう教えていくかが相談された。が、明確な答えは出せず、結局は保留。ただし一周間に一度ほど、両者に指導教員を付けて「それら」の「知識」をいれさせることが後に決定された。
赤目の指導教員は女性医師、弘中和人の指導教員は羽貫、長田を筆頭とした基地内兵士である。

羽貫軍曹らの部屋は僕らの部屋よりも広く、八畳程の空間に四人で生活しているらしかった。窓はとっくのとうに開け放され、どこからか持ってきたホワイトボードを部屋の上座に設置し、その前に僕が座る。それを取り囲むように数人の男達が今日は俺たちが教える番立場逆転だぜ、とばかりにふんぞり返っていた。特に長田軍曹が。
「え～、授業を始めます」
羽貫軍曹が仕切って始まる授業。長田他数名がいそいそと教本の準備――この日の為に教官から隠し続けた物を持ってきたらしい――を始める。ピンク色の装丁に女性が扇情的なポーズで映っている。
「まず初めに、おしべとめしべ説、コウノトリ説、キャベツ説、は間違いです」「そんな馬鹿な！」「はい、最後まで聞いてください。それらは微妙なお年頃の少年少女の問いかけをはぐらかす為に数百年の歳月守られてきた秘伝の小話です。では、これから本当の事を教えていきたいと思います」
羽貫軍曹がクイと手を振って合図をすると、長田軍曹が黙って頷き、傅いて僕に本を渡した。パラパラと捲って見ると、女性があられもないポーズでアラレモナイ事ヲシテイマス。脳がぐわんぐわんして思わず本を閉じたのを、両脇から伸びてきた手が再度ページを開かせ、無理やり僕にページを見せつける。目を閉じれば誰かの手が僕の瞼を強制的にあける。視点をぼやかせば目にライトをあてられる。何この拷問。
「はい、そこまで。弘中君が失神してしまう前に一旦ストップ」
チッと舌打ちして男たちが離れる。

「弘中君は小学生高学年の如きメンタルだという事がはっきりしました。では、ゆっくりいきましょう。大丈夫、怖くないですよ？」
僕以外全員が笑いをかみ殺している。否、長田軍曹は腹を抱えて笑っているが、笑い過ぎて音が出ていないだけだ。
「まず最初に、穴にナニをいれる。コレを覚えましょう。そしてナニをナニしてナニすると子供ができます。専門的に言うなら精子が卵子と受精して、子宮内膜に着床すれば子供ができます。ここまではオーケー？」
頷く。すると羽貫軍曹が「コレ以上、何を教えろってんだよ上層部は……。俺らも専門的なこと知らないっての」「いやいや、実技はあるだろ？」「ここ最近のか？　それとも、ちゃんとした女とのか？」まぁまて落ち着け、と長田が言い、次の教官に自ら立候補した。
「えーでは次に軍内部、特に前線基地での穴につ」長田軍曹が他全員に頭を叩かれて黙った。僕が何事かと身構えていると、早過ぎるだろ、俺らを警戒するぞ、馬鹿かお前、馬鹿がお前、などと長田軍曹に小声で耳打ちしている。腹から声を出す発声法が体に染み付いてしまっている彼らは気付いていないが、小声でも声は聞こえている。
結局この日はグダグダのままに終わり、男子組の二回目以降は実地されることはなかった。
だが、赤目組は中止されることなく順調に進んでいるらしい。男子組が中止されてから三週間が経過したが、周毎に赤目は徐々に恥じらいを覚えていき、ついには着替える際僕に目隠しをさせるようになった。その逆も僕に強要してくる。次の一周間が過ぎたら、縛られたりするレベルになるのではなかろうか。

人間　四

季節はまもなく夏になる。
部屋の温度はますます上がる。最近麦茶が薬缶にいれられ部屋においてあるが、そろそろ限界と言わざるを得ない温度だ。だが、使われる為に作られたモノとしてぶっ倒れるまでは耐えるべきだろうか？　それとも、機械的に限界を告げ、待遇改善を要求すべきか。
そう思いながら今宵も僕は箱に接続を開始する。うつ伏せになり首にコードを繋いで、闇夜の中青色のウィンドウを眺め、思い、操作する。しかし、どうにも最近、誰かに見られている気がする。闇夜の中というよりは、電子の世界のどこかから。ＬＡＮを通して誰かが僕をモニターしているのだろうか？　それ自体は構わないのだが、時折不規則に入るノイズは止めて頂きたい。もしや、本当に電脳の故障か？　生体素子を使った自己修復機能付きの電脳だが、故障が１００％ないとは言い切れない。
僕はまず、電脳に検査用のパルスを走らせた。異常なし。続いて箱に以上データ等がないか走査する。生体素子本体に違和感。
「なんだ？」
赤目は既に眠ってしまっているらしく無反応。
生体素子に違和感があるが、判然としない。そのまま暫く生体素子の違和感について考えたが『故障』『不具合』と判断を下し、翌日医務室に行って検査の要請をしようと決めた。

……――――――知識を共有。
――……自己を再生。
――――――電脳幽霊が起動。
……認証名グリング。

小田切一馬は思考する。はたして、自分がグリングに下した処置

は正しかったのどうかを。研究所から富士宮基地司令部のコンピューターをハックし、気付かれない様に注意しながら、いつものようにＬＡＮ回線を通して彼の脳内を見守る。
不味い眠気覚ましの珈琲を呷り、彼が箱と接続しているのをモニターしている。すると、彼が違和感に気付いたらしい事に頬を喜ばせた。
ここひと月小田切一馬は数々の暗躍を繰り広げていた。その一つはわざわざ隠していた１７年前の報告書を三笠に渡し、彼らの生活を確保することであり、もう一つは箱の中の彼女を再生させることだった。
グリングの脳波データをそっくりそのまま生体素子に焼きうつす。成功してもしなくても、一研究員的にはあまり興味がなかった。何故グリングが自ら生体素子に魂を移植し、次席にいた和人に主席の座を明け渡し、あわよくば自分が彼に使われる道具になろうとしたのか。それはわからない。興味をひかれない。わざわざグリングの意思通りに箱を彼に渡したのは、まぁ気まぐれだが、調子が悪ければ変えればいいだけの話だ。だからそれ以上考えない。だが、成功し始めている電子の海の幽霊には心躍る。
彼が箱との接続を終了し、脳内にα波をまき散らし始めたのを確認すると富士宮基地の支配権を戻し、別の事に思いを馳せる。
きっと、１８年前。全てが始まった時に三笠や、他の誰かが自分の計画を本当に理解していたなら計画は始まらず、自分は狂科学者として屠られていただろう。
だが、俺は生きている。
なら、世界は俺の思うように動く。
「さて、」
キーボードを叩きながら、最後の仕上げにうつる。全てが露見する日は遠くない。その日までに、彼らを守る布石を打っておかねば。
果たして、肉を持たず、記憶を持たず、自我だけを持つモノは人

間なのだろうか。

幽霊　一（前書き）

戦闘入るので、少々長めです。

幽霊　一

幽霊

検査結果は異状なし。その事に疑問を覚えながらも弘中和人は礼を言い、医務室を後にした。時折外から根性出せぇ！　と怒鳴り声が響いてくるが、それが妙にしっくりくるのは僕がこの基地に慣れたからだろうか。

怪が出現する際には、出現地点から半径数百ｍにおいて電磁波や以上熱源が確認されることがある。ここ数日間その熱源反応が旧天竜区において観測されている。大型の反応ではないが、恐らく数日中に怪が発生するとあって基地はにわかに活気づき、既に１２０名程の隊員が現地周辺塹壕において待機と迎撃準備を始めていた。

基地司令の東中久仁彦は手柄大好き人間である。コレが富士宮基地における共通認識であった。基本的に東中基地司令は「空気の読めないトド」として名を馳せているが、超お金持ちから軍属になったというエリートコースを歩いてきた男なので、誰も文句を言えない。さほど優秀ではないのは基地内の全員が知るところで、特に現場叩き上げの上官の中には腸煮えくり返る思いをしている者も多いとか。基地司令の横暴を止められるのは副司令官だけだが、副司令官の戸田清は、それそれで問題があった。事なかれ主義なのである。

よって現在富士宮基地においては東中基地司令には逆らうな、という不文律がある。元より上官に逆らうなどもっての外だが、さらに戒める必要があるということだろう。

翌々日、怪が発生する予兆の電磁パルスが跳ね上がった。

現場待機中の１２０名に、手柄を独り占めするべく３００名の兵士を連れた東中基地司令が足され、さらには現場を一度見ておくと言う名目で僕と赤目も旧天竜区に派遣された。移動には富士宮基地から長野県各部に繋がっている列車を用いた。同時に２０００人を

運ぶことの出来る、軍部専用車両だ。
旧天竜区二俣川周辺には既に機関銃と塹壕が用意され、熱源反応のある川向うからいつ怪が現れても迅速に対応できるようになっていた。
人のいないゴーストタウンの中を赤目と二人、現場から数百m後方の軍所有ビルの屋上で待機している。
しかし、陣の置き方が悪い。こじゃ右翼と左翼で攻撃ができない部分が多すぎる。前方に照準を合わせる限りは問題ないけど、もし後方に回られたりしたら火力が４割は使用できない。死角も多すぎる。
怪が出現する予定の川面は不規則に波打つ事があり、兵士の緊張を否が応にも高めていく。瞬きさえできない。
午後５時３７分。瞬きもしていないのに遥か遠くに唐突に何かが現れた。
「蟲型、蜻蛉に類似するモノが二体。あとは骨型の狼に類似するものが一体です」
赤目が目をキチキチ言わせながら教えてくれた。僕は手元の双眼鏡を覗きこみ、赤目が言った通りなのを確認する。体長１０mを越す蜻蛉と、７m程の狼。蜻蛉の羽が夕日を受けてキラリと輝き、その透明さの向こうに空をうつす。
「飛行型が出たんだ……。どうするんだろ。機関銃の整列だけしかされてないんだけど、コレって確か東中基地司令の判断だよね？」
「そうですね。ココ二年間飛行型が出ていなかったからと言え、油断しすぎですよねー」
「赤目、敬語敬語」
失礼しました、と返す赤目の横で双眼鏡を覗いていると、不意に蜻蛉型が高度を上げ始めた。追いすがる様に機銃の掃射が上がるが、限界値に来て止まる。そこに狼型が突っ込んでくる。辛うじて両翼の攻撃が牽制として間に合うが、どう贔屓目に見ても上手くない展開だった。蜻蛉は高度１００m前後で旋回を始め、狼型はビル群の

隙間を縫うようにして姿を消した。
「展開包囲網って敷いてたっけ？」
「東中基地司令はいらないと言ったそうですが、他の方々がゴリ押しして、それぞれ１キロ後方、４キロ後方に２つあります」
「東中基地司令以外、胃に穴が空きそうな心境だよねきっと。それで手柄を盗られるんだから大変。お、蜻蛉型が何か落とした」
「岩ですね。機関銃が二門使用不可。あの蜻蛉、腹の下に腕ついてますよ」
「多関節の足だね。あ、狼型が中央を食い破った」
「幸いにも死者は出ていませんが、一人腕を噛みちぎられた方がいますね」
下から撃たれるＡＲの猛攻も、蜻蛉の軌道に追いつけない。不意に止まったかと思うと、次の瞬間にはトップスピード。ジグザグに動き、左右だけではなく上下にも動く。
箱と繋がっている赤いケーブルを指で触りながら計算を開始。このままだと中央突破した狼型が右辺に食いつき、蜻蛉型が錯乱を行って、何でもない戦闘なのに死傷者が出る。という結論が出た。計算するまでもないというか。
僕から箱に繋がり、箱はさらに赤いラインを伸ばして軍システムと有線接続されている。このコードの限界がある為僕と赤目は後方待機しているわけだけど、正直もどかしい。無形を警戒しての対策なんだろうし、指揮官は前に出る必要がないからコレでも良い訳なんだけど……。
――東中基地司令から入電。上空の蜻蛉二匹を撃ち落とし、狼の足止めをしろと。
「任せっきりじゃんか。ただ飯食わなくて良かったね、赤目」
「そうですねー」
タァーンタァーンと音が連続して、上空の蜻蛉の軌道が揺らぐ。トップスピードからの静止が上手くできず、徐々に高度を落とし始めた。それを見ているとさらに発砲音が響き、狼の右前脚が弾けた。

一瞬よろめく狼に機関銃と９８式の斉射が浴びせられる。当初構えていた陣の裏側で狼は活動を停止し、僕らは焦点を蜻蛉に合わせる。上空にいた蜻蛉はもうビル群のすぐ上まで高度を下げていた。
唐突に、蜻蛉が緑色の体液を腹から吹き出しながら高度を上げ始めた。９８式の弾丸もずぶずぶとその体に沈んで行っているが、最後の力を振り絞るようにして蜻蛉は上昇。高度１５０ｍに達すると、旋回しながら下降を始めた。まるで周囲の様子を確認しているみたいだ。全員が蜻蛉二匹の奇妙な行動に注視していた。
「本陣後方５０ｍ！」
突然赤目が無線機に向かって叫んだ。ハッとしたように本陣の周りで動きが生じるが、それを嘲笑うように蟲型、蟻に似た怪が食い付く。体長５ｍ程の蟻はまるで伏兵の様に、油断が生じるその時まで待っていたようだった。数多の発砲音が轟くが、蟻の歩みは止まらない。自身の体重の５００倍のものまで運べる筋肉が唸り、蟻の足に触れた兵士が吹き飛ぶ。顎がわなわなと動いたかと思うと兵士幾人かを一度に噛み千切り、口の端から腕や足をぼろぼろと零しながら、中央を突破していく。痛覚のない蟲ならではの、異様な生命力を有する蟲ならではの、単機中央突破。もう後いくらもない位置に、東中基地司令が脂肪を揺らしながら何事かを叫んでいる。
「赤目！」
「わかってます」
赤目が立ち撃ちでドラグノフを連射する。半オートマチックの狙撃中であるドラグノフは弾倉をあっという間に空にしていく。赤目の速射は蟻の足を全て吹き飛ばしていた。足関節の真ん中に穴が空き、それでも千切れない足もあったが既に前に進む事は出来ない。僕もそう思った。ゴロリと横たわった蟻がにわかに脈動し、その内部から体長５０？ほどの、それでも巨大な蟻が多数飛び出して辺りの兵士に噛み付いた。
「何だあれ！？」
怪の体の中からさらに怪が出た！？　そんな発見例は今まで報告

されてないのに。
　赤目が懸命に狙撃を続け、親蟻から飛び出した小蟻を7匹程仕留めるが、総数の2割にも及んでいない。その間にも蟻は放射状に飛び散っていく。その様子を文章化しながら軍上層部と富士宮基地に送り続ける。電脳将校として出来うる限り情報収集に努める。
　誰もが忘れていた。
　僕も、赤目も、地上で狼狽える兵士も。
　誰もが忘れていた。
　上空を旋回していた蜻蛉がビル群よりも低い行動になり、その腹を破ってあの腕の持ち主が降下されたことに。体長４ｍの蜘蛛が蟻と共同し挟撃するように反対側に降り立った。
　まず、迎撃にそこまで追われていなかった両翼の兵士が気付いた。が、伝令は伝わらない。蟻の事でパニックになっていたからだ。独自の判断で蜘蛛を撃ち始める両翼の兵士たち。だが、蜘蛛はすぐにビル群に阻まれ見えなくなる。分隊を出して索敵、迎撃、撃滅と行くのがセオリーだが、今は指示できる人間がいない。トドはまだ後ろから迫る蜘蛛に気付いていない。前方に蟻、１４０ｍ。後方に蜘蛛、６０ｍ。間に合うかどうかの、瀬戸際。
「赤目」
「何ですか！」
　赤目はビルに阻まれ見えない蜘蛛を諦め、小さな蟻を撃ち抜き続けていた。
「後で自分は止められなかったって、証言してね」
　赤い有線を伝って意識を富士宮基地内部へ、そこから現場指揮のモデムに飛ぶ。目の前にうつる虚構の文字を追いながら、そこの回線の一つに僕の無線機を割り込ませる。両翼の無線機を奪取し、
「右辺は8名の分隊を出して先行させろ。左辺は蟻までの射線が空いているから蟻に集中。中央はその場で迎撃せずに下がれ。機関銃は蟻ではなく後方の蜘蛛に向けて、右辺は蜘蛛が逃げ出してきてもいいように中央後方２０ｍ地点に照準」「誰だきさ」東中基地司令

の無線をオフにする。指揮権の奪取、軍法会議確定だな。僕の無線機に集中するのは「お前は誰だ？　司令官からの通信が途切れたが、何事か」というもの。それらに一括して「東中基地司令に不足の事態が発生。また、次の指揮権を持つ最上二尉は蟻との戦闘で指揮が出来ず、代わりに特別指揮権を与えられている弘中和人軍曹が担当する」と返した。半白置いた「了解」の声に頷きながら細かい指示を出していると、赤目が片目を僕に向けて、微妙な顔をしていた。

「嘘は言ってない」

しれっとそう言うと、やれやれという顔をしながら赤目が連射を続けていく。しかし、立ち撃ちでよく味方に当てないモノだ。

予想よりも蟻の移動速度が速い。中央前方約７０ｍに蟻が３０匹。中央後方２５ｍでは蜘蛛が四方八方からの銃撃に立ち止まり逃げ惑っているところ。赤目が撃ったと思しき銃弾が蜘蛛の頭に口紅程の穴をあけている。やはり問題は蟻だ。「中央、陣地を捨てて右翼側に撤退。右翼は機銃掃射を辞めて中央隊の援護。左翼は展開して蟻を囲い込め。ただし射撃は右翼のみとする。左翼はあくまで追い込み役。同士討ちをしないように、射撃はあくまで右翼のみとする」

『了解』

返事に安堵し息を吐いた。コレで大丈夫、全て上手くいった。ほ、と息を吐いた瞬間――『東中司令官が中央陣地から撤退しません！』切羽詰った声がそう叫んだ。

……は？　どうして？　一人で陣地に残ってるのか？　恰好の餌食じゃないか。

『自分は撤退命令を出していないと、陣地に留まり続けています！』

悲鳴に近い声が耳をつんざく。一瞬凍りついた脳。

『左翼一班、目標地点到着』『指令！』『右翼射撃を開始できない繰り返す、右翼射撃、』

『二班もつきました！』『意地はらないでこいや阿呆！』『何で司令官残ってんだ？　拾っ』

『三班、目の前に現れた蜘蛛二匹を撃滅！』『馬鹿指令！』『撃て

ねぇぞ、おい！　どうす』
『右翼一班、指示願う』『誰かつれてこいよ！』『おいおい、まにあわねぇぞ！　撃つのか？』
ただ一人陣地に取り残された東中司令官。慌てて中央兵が右翼から走って戻っていくが、間に合わない。彼らが辿り着くより早く、蟻が東中司令官を襲う。双眼鏡で覗いた先、東中司令官が通じない無線に向かって叫び続けている。蜘蛛は沈黙した。残りの蟻は１２匹。間に合わない間に合わない、もう絶対に間に合わない！　東中司令官前方１０ｍに蟻、右辺３０ｍに中央及び右翼兵。――間に合わない！　赤目がただ一人、歯を食いしばってドラグノフを連射している。蟻の残数が１１，１０，９、外した、８、７、６、弾切れ。最後の弾倉。５，４，３、ビルの陰に入った。東中司令官まで残り５ｍ。右翼の狙撃兵が独自判断で射撃。三発中、一発が蟻に命中。残り一匹。残り一匹なんだ。誰か止めてくれ！
意識を無線機の権限奪取から外してしまった。
『ひぃ、ぃぃぃぎゃあああああああああああああああああああああああああ！』
音量ＭＡＸで、５０？の蟻に足首を噛まれた東中司令官の絶叫が木霊した。
絶叫は随分と長い間、ゴーストタウンに響いていた。総勢５００名の無線機から迸る叫び声。右翼兵が中央陣地に辿り着き、ナイフで蟻の足を削ぎ、顎を切り取って東中司令官から外した後も。暫く悲鳴とも泣き声とも取れる音が木霊していた。

幽霊　二

叫び続ける東中司令官は麻酔を撃たれて一度おとなしくなったが、その後で僕への悪口雑言をこれでもかと吐いたらしい。全ては後で聞いた話だけど。同刻、僕は軍用のジープに揺られながら茫然自失としていた。どうして退いてくれなかったんだろう。無線機の回線は、東中司令官から全体への送信を不可にしただけで、受信は出来ていた筈なのに。

東中基地司令は左足首をほぼ失ったらしい。本人はクローンによる移植を強く希望し、事実それは叶えられた。ただし、左足首の細胞がずたずたに噛み切られていたらしく、一度ひざ下まで切断した後の移植だった。話によると、以前よりも左足が数ミリ長くて歩きにくいとか何とか。

そして訪れた審判の時。僕は特別指揮権を「上官を貶めて奪った」とされ、一度は銃殺刑になり、気付いたら営倉送りにされていた。東中基地司令官の憎々しげな顔を見る限り、彼が望んだわけではなさそうだった。後から聞いた事によると、羽貫軍曹や、その時戦場に出ていた兵士が「東中基地司令官に逆らうべからず」の禁を破って、「あの時の判断の正しさ」と「東中基地司令官の落ち度」について上告したらしい。そんな彼らが今、僕とは別の営倉にいれられ呻き声を上げている。トイレと硬いベッドがついているだけの営倉。本来数人で入る筈のそこに僕は一人きりで入れられていた。富士宮基地の地下三階の営倉は寒い。夏目前だと言うのにコンクリート製の床は死ぬほど冷たい。隣の営倉から聞こえてくる「あったけぇー」「押すな押すな、落ちる！」「あったかいけど、くせぇ」等と言う声が羨ましい。隣の羽貫組営倉が騒ぐ度に営倉の管理官がつかつかと歩いていく、その度に静まり返る営倉だが、2回に1回は全員整列させられて頬を張られていた。

またしても始まった話し合いに耳を澄ませながら、僕は目に映る

虚構の紙に「何故自分があの時ああしたか」という題目でレポートを描き続けていた。レポート作成は基地全体の決定であり、僕の精神状態に異常がないかどうかを調べる為でもあるらしい。レポート作成の為に渡された箱も床と同じ温度。

――まただ。

レポートを作成している時に感じる、誰かの視線。ＬＡＮ回線はＯＦＦになっているのに。電脳にも箱にも異常がなかったのに、この視線は確かに感じる。じろじろと僕の一挙一動を見つめるような、むしろ僕の中と一体化しようとするような。不可思議で気味の悪い感覚。ノイズは走らないが、何かがオカシイ。

「俺さぁ、ココでたら結婚するんだ……」「営倉で死ぬ気か？」「それっていつからあるネタ？　２０００年代？」「古いなぁ」「ところでさぁ、俺さぁ、靴下干したっけ？」「しるか」「営倉出て、俺のクローゼットの中腐ってたらどうしよう……」「貴様ら！　営倉に入ってる時くらい静かにせんか！」「眠ってます」「寝言です」「ぼっちりです」「ぐーぐー」「むにゃむにゃ」

相も変わらずお隣は騒がしい。見られている気がしたのは気のせいか。辺りのコンクリートに顔らしき汚れがあったのかもしれないし。時折羽貫軍曹が寝言で「弘中さん、無事―」や長田軍曹の「しりとりしようぜー。俺からスタート。アダムスキー型円盤」「コイツ馬鹿じゃね？」等と言う声が掛かる。その声に頬を張られるのを覚悟で毎度返すと、案の定管理官が僕を叩きに来る。真っ赤に染まった手。むしろ、僕らよりダメージが深いかもしれない。

「羽貫軍曹や、長田軍曹はさ。どうして僕と話してくれるの？」

僕が話し出すと、営倉の管理官は何かを諦めた様に、「５分だけだぞ。５分だけトイレに行ってくるからな。別にお前たちの為なんかじゃないからな！」と残して本当にトイレに行ってしまった。長田軍曹が「ツンデレだ」と言い、頭を叩かれる音が連続する。

「んー、何でって、勉強教えてもらえるじゃん。俺勉強したくて軍入ったからさ」

羽貫軍曹が答え、
「親父の言葉でな。頭の良い奴についていくと、意外とおこぼれが貰えるとい言われていてな」「長田は黙れ、俺たちの評判が下がる」
僕の質問そっちのけで喧嘩を始めてしまった隣の営倉。苦笑を漏らしながらレポートの作成に戻ろうとして、
——頭が良いというのは、辛い事を我慢できたかどうかの差だと思うのですが……。
頭に直接響く彼女の声。懐かしきグリングの声。脳を焼かれて死んだ、彼女の声。
身震いするほどにリアルな幻聴が僕に語りかけてくる。
——どうも、お久しぶりです。私が誰かわかりますか？
頭に思い浮かべる。脳裏に浮かびあがる言葉は、
——グリング？
——はい。
——僕、疲れてる？
——幻聴だと思われているなら、私に訊いても無駄かと。
この言い草、確かに記憶の中のグリングと同じ。声もそっくり同じように感じる。聞こえているわけないのに、感じる。少しハスキーな、それでいて高い少女の声。
——君は、本当にグリングなの？
——正確にはグリングの思考をベースに、記憶をアナタに頼った電脳幽霊とでも言うべき存在です。
訝しげというのも変だが、問い掛けた僕にグリングが抑揚のない独特のペースで返す。
——混乱していると思われるので、説明しても？
頷く、ような反応を脳内に返す。正確には電脳から繋がっている箱へ。
——私は電脳との接続実験によって脳を焼かれたのではなく、私の思考回路を箱の生体素子に焼付ける際の余波を受けて、脳が焼かれただけです。その後私の思考回路が付属された箱を、遺言通りに

小田切博士がアナタに届けて今に至ります。また、今まで私が表層化しなかったのは、アナタの記憶。より正確には電脳に保存されるバックアップに私が登場しなかったからです。先ほどの頭の良い人、という発言から私を連想したアナタによって電脳に一次記憶として私のデータが

営倉管理官が戻ってくる。そして皆が静まっているのを見てやれやれと一息吐き、用意されていた椅子にどっかり座った。

――記録された為、そのデータを復元、使いまわす事によって、私の声。及び私についてのアナタの記憶から私の思考回路と照合。復元された、オリジナルとは違う私を箱に記録し、今アナタと話している次第です。

――オリジナル？

――雛形に経験という刺激を与える事によって人格が形成されます。今の私はその出来上がった人格を模倣しているだけであり、私と違う経験を積んだアナタではオリジナルのグリングになり得ません。

――でも、僕の記憶の中のグリングとまったく同じだよ？

――アナタの記憶から再現されたモノですので、それ以外ないかと。

そう言って箱の中のグリングが押し黙る。にわかに箱がぶぅぅぅぅんと唸りを上げて何かを起動させる。

――私が、なぜ、ココに入ったか訊かないのですか？

何も起動しなかった。その代りに、妙に平静を保っているかのような、機械にはありえない感情のようなものを感じた。もしかしたら、グリングは感情を理解した機械という都法もないモノになっているのかもしれない。

――聞かせてくれるな、聞きたいよ。

――そうですか……。そうでしょう。そうでしょう！　何たって私天才ですから。天才が何故このような蛮行に至ったかを知りたい、それは人として当然の事でしょう！

グリングが素の部分を出し、箱の中で何かが高速回転している。先ほどよりも強く強く。何かが起動するのかと思ったが、思えばグリングというプログラムが既に起動している。つまるところ、今箱に掛かっている負荷はグリングが何かを高速で計算しているということになる。計算で出来た感情が高ぶっているせいかもしれないけど。

――昔、小田切博士が唐突に私たちにした質問を覚えていますか？

――答えられてはいけない、っていうアレ？

――夫が死んで妻がお葬式を開いた。そのお葬式の時に夫の同僚とその妻がいい感じになった。それから暫く経って、妻が息子を殺した。なぜ？

そんな質問があったことを、確かに僕は覚えている。今でも時折思い出しては、なぜあんなことをしたのかと考える事がある。

――小田切博士はペアの一人一人に紙を渡して、一つだけ答えを書きなさい。そう言って紙を配った。なのにアナタは二つの正解を答えた。紙に書かれていたのは、「皆さんが僕に求める答え、わからない。邪魔だったから。殺したかったから」そして、「皆さんが答えて欲しくない正解。逢いたかったから」そう、アナタは書きました。それを見た小田切博士は吹き出して言いました。「正解。このクイズは答えちゃいけないものなんだよ。このクイズに答えられてしまった人は皆、何かしらの猟奇事件を起こしたと言われている。だが、この答え方の場合はどうなんだろうなぁ！　ナハハハハハハハ！」心底楽しげに笑う小田切博士と、慌てた様に目配せをする研究員。特にアナタの担当だった常盤さんは見物でしたね。顔を真っ青にして、どうしてそんな事を書いたんだって、アナタに詰め寄って。

クスクスと僕の脳内にまやかしの笑い声が響く。響く。堪え切れないとばかりにグリングが笑う。壊れた様に、虚ろに響く笑い声。クスクス、クスクス。

――その時私はアナタに嫉妬しました。

――嫉妬？
唐突に響く声に、本当に驚きながら問い返す。
――嫉妬って、何でまた？
――はい。アナタは、私以外の皆は知らないのですが、小田切博士はその答えを出す子供がいる事を望んでいたんですよ。まともな思考回路の天才は幾らでもいる。だが、そいつらでは怪が何たるか、その本質を見つけられなかった。だったら壊れた思考回路を持つ天才がいたら、どうなんだろう。小田切博士が漏らしたその言葉を、私だけが聞いていました。私たちは人間兵器となるべく育てられました。作られました、ですね。人間兵器とは何か、小田切博士が欲している存在です。私たちの存在意義は、私の存在意義は小田切博士の望むモノになり続ける事でした。私は勉強をする事ができます。賢くなる事はできます。だけど壊れる事はできない。そう悟ったんです。恐らく、その時の私は悟ったのでしょう。だから私は今、ココにいるのだろうと推測する限りではありますが、だからこそ私はアナタに嫉妬した。のでしょうね。博士に選ばれるのはあの時点でアナタに決まりかかっていました。私は選ばれない。ならばココで黙して廃棄処分されるよりは、私が嫉妬したアナタが如何なる存在となるのか。ソレを見届けるが為に私は、私の脳をコピーしました。そして、小田切博士の道具の道具になる事にしたのです。ところどころ私の脳からコピーした情報が欠けていて、推測が混じりましたが、コレで正しいはずです。
グリングと僕は赤いコードを通して繋がっている。
話の最中のグリングからは言い知れぬ嫉妬を感じ、小田切博士への崇拝を感じ、そして涙の味とでも言うべき感情を味わった。舌の上で消えぬ、脳裏に直接流れるその悲しみはいつまでもいつまでも僕の脳で再生され、反響し、そして心の奥深くに沈殿した。
――僕は壊れているのかな？
何を今さら、とばかりに箱が唸りを上げる。

幽霊　二（後書き）

なんか良い区切り見つからなくて、大分長くなってます。ごめんなさいです。あと感想欲しいです。一人でつっぱしてるんじゃね？
コレ本当は面白くないんじゃね？　って結構不安です。

幽霊　三

『６月１４日。長野県旧天竜区での怪との戦闘について。
上空から見ていた限り、突然の怪の行動に東中司令官が――中略。
今回出現した怪の特性としてまず、兵力を温存しておくということが上げられます。親が攻撃を受けると中から親の体を食い破って出現する方法は、実際にそういった生物も存在しますが日本には存在せず、よって彼らは第三の進化を始めた可能性があります。環境進化と適応進化に続く新たな進化、仮にココでは戦術進化と呼称します。今回の怪がとった戦法は従来のものと異なり、伏兵という概念に当てはめる事が可能です――中略。
怪が人間の手法を学習しだした可能性があり、今後からはより人間的な運用を企てる可能性もあり――中略。
また、戦闘中、蜻蛉型二匹が深手を負った後も、考えてみれば深手を負う前にも、旧天竜区の地形を観察するかのような言動が確認されており――中略。
まとめとして、今後の怪の動向には２０年間の常識が通じなくなる可能性があり、兵法と陣地の見直しを今一度されたし。

弘中和人』

弘中和人のまとめたレポートを興味深そうに読んでいる人物がいる。
事なかれ主義の副司令、戸田清である。彼は時折ふんふんと頷きながらレポート読み、その傍らで雑務をこなしていく。時計の針は午前3時を指し、東中基地司令はとっくのとうに就寝しているが、特段気にした風もない。東中基地司令の無能を支えているのは戸田清副司令の活躍が大きい。滅多に表立たない為「事なかれ主義一徹」のイメージが強いが、どちらかというと縁の下の力持ちの役割が大

きい男である。
戸田清は細身の体をくねらせ、腰を回してコリをほぐしてから雑務に戻る。その際にふと物思いに耽ると、東中基地司令が大好きなゴルフの予定をスケジュール表に混ぜた。そして経理の書類を出すとそこに判を押し、次いで弘中和人と赤目の行動についてまとめた書類を出す。そしてそこに「エアコンを導入」と達筆なようでいて下手糞な文字を書き、判を押す。
恐らくこれから先、東中基地司令は人間兵器の彼らを目の敵にするだろう。公費で足の治療費が出ようが、自分の無能を棚上げにして魔女狩りを始めるに違いない。そうなる前に東中基地司令のご機嫌をとりつつ、さっさと彼らに金を使ってしまおう。少なくとも東中基地司令よりはこの基地にとって有用である。
事なかれ主義を貫く男は、波風を立てないようにしながら物事を回していく。

基地の六割の人員は人間兵器に対して興味はあるが近づかず、二割は敵視し、一割は行動に移す。そして残った一割が、弘中和人達にとって得難い味方であった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4574z/

8-

2011年12月24日10時48分発行